

独居高齢者の幸福感とその関連要因

松岡英子

Key Word: subjective well-being (主観的幸福感), elderly living alone (独居高齢者), correlates (関連要因)

I はじめに

人口の高齢化はわが国に特有な問題ではなく、多くの国が経済発展の過程で共通に経験する問題である。しかし、わが国の人口の高齢化は世界にも類を見ない急速な速度で短期間に進行しており、21世紀初頭には本格的な高齢社会の到来が予想されている。高齢夫婦世帯および高齢単独世帯をあわせた狭義の高齢者世帯数は、この30年間に4倍以上に増加しており、厚生省人口問題研究所の推計によれば、今後さらなる増加が見込まれている。このうち、高齢単独世帯は1990年には162万世帯であったが、2010年には463万世帯と2.9倍に増加する見込みである。

幸福で生きがいに満ちた高齢期を迎えることは万人の願いであり、老年学に課された究極の課題は幸福に老いるための条件を明らかにすることであるとされてきた。社会老年学においては、「生活満足度」や「モラール」などの操作的概念を導入して幸福な老いの程度を測定し、その関連要因を明らかにするという研究が1960年代頃からアメリカを中心に進められてきた。わが国でも1970年代後半から精力的に研究が進められている。しかし、独居高齢者を対象とした研究はほとんど見られない。

本稿においては、幸福な老いの測定とその関連要因に関する先行研究の成果を紹介し、今後増加が見込まれる独居高齢者の幸福感に焦点をあてて、その関連要因を明らかにすることを目的とする。

II 先行研究

“successful aging (幸福な老い)”に関する研究において、その第一歩は「幸福な老いの程度の測定」をどのようにするかである。高齢者の幸福感の測定に関する研究からは、Neugarten, et al. (1961) の生活満足度尺度A (Life Satisfaction Index A) と Lawton (1975) の改訂 PGC モラール・スケール (Philadelphia Geriatric Center Morale Scale) の2つの代表的な測定尺度が開発されている。そして、これらの尺度の内部構造の分析や、それに基づいた改訂作業が繰り返し行われてきた。Larson (1978) は、生活満足度尺度やモラール・スケールなどの自記式尺度によって測定された幸福な老いの程度を総称して“subjective well-being”と呼ぶことを提案し、以来この語が広く用いられている。わが国ではこの訳語として「主観的幸福感」が用いられている。

高齢者の内面的、主観的な幸福 (subjective well-being) を客観化し、科学的に計量する試みとして、生活についての満足度の測定法がいくつか開発されている。そのなかで最も高く評価され、また、欧米で実際の研究に主として用いられているのが、生活満足度尺度 A (LSIA) である。これは高齢者の主観的幸福感が、(1) 日常生活におけるいろいろな活動に喜びを見いだしているかどうか、(2) 自分の人生を意義あるものと感じ、これまでの人生をはっきりと受け入れているかどうか、(3) これまでの生活において、自分の人生の主たる目的を達成し得たと感じているかどうか、(4) 積極的、肯定的な自己像をもっているかどうか、(5) 幸せで楽天的な態度、もしくは気分であるかどうか、という 5 つの要素から構成されているという前提に基づいて 20 項目の質問が用意されている。

Adams (1969) は LSIA には不適切な項目が 2 項目あるとして、18 項目の改訂版を提案している。また、Hoyt and Creech (1983) は 8 項目に削減し、Liang, et al. (1988) は 7 項目を提案している。これらの改訂版においても、LSIA の基本的な因子構造については維持されており、「気分 (mood tone)」「生活への熱意 (zest for life)」「目標と現実の一致 (congruence)」という 3 つの因子の存在が繰り返し確認されている。

もうひとつの代表的な尺度である改訂 PGC モラル・スケールは、22 項目からなる旧 PGC モラル・スケールの因子分析結果から 3 つの因子に所属する 17 項目を選択したものである。3 因子とは「心理的動揺 (Agitation)」「孤独感・不満足感 (Lonely Dissatisfaction)」「老いに対する態度 (Attitudes toward own Aging)」である。改訂 PGC モラル・スケールはこれまでに最も広く使用されてきた測定尺度であり、その因子構造も繰り返し吟味されてきた。

Liang and Bollen (1983) は Lawton (1975) の説明的因子分析を用いた研究の問題点を指摘し、それらの問題を克服する試みとして、確証的因子分析 (共分散構造モデル) による PGC モラル・スケールの分析を行った結果、15 項目に削減している。さらに、Liang, et al. (1987) では改訂 PGC モラル・スケールの質問項目を 6 項目削除して 11 項目にしている。こうした質問項目数の減少は、当然のことながら合計得点の分布に影響し、項目数が少ない Liang, et al. (1987) の尺度は、得点のレンジと標準偏差が最も小さく、信頼性係数の値も最も小さくなっている。さらには、項目数を精選した尺度を用いた場合も、それらのもとになった PGC モラル・スケールを用いた場合でも関連要因との関係にはほとんど変化がみられないことが示されている (古谷野ら, 1989)。結局のところ、多くの研究において Lawton が報告しているのとほぼ同様の因子構造の存在が確認されており、改訂 PGC モラル・スケールは今なお代表的な尺度であると評価できよう。(George and Bearon, 1980; 古谷野ら, 1989)。

LSIA と改訂 PGC モラル・スケールを比較すると、LSIA は改訂 PGC モラル・スケールの心理的動揺に関する質問項目をほとんど含んでいないが、改訂 PGC モラル・スケールでは直接には表現されていない過去の人生における成功、失敗に関わる質問項目を含んでいるという特徴をもっている。主観的幸福感に関する理論的、概念的な検討の必要性を指摘して、George (1981) は測定される主観的幸福感が「認知であるのか感情であるのか」

「短期的なのか長期的なのか」という整理をすべきであるとしている。この観点から両尺度を比較すると、長期的なのはLSIAの「目標と現実の一致」の次元の項目（「人生をふりかえてみて満足できる」など）だけであり、他は一過性で変化しやすい短期的な項目である。また、認知的なのは先のLSIAの「目標と現実の一致」の次元と、改訂PGCモラル・スケールの「老いに対する態度」の次元（「年をとって役に立たなくなった」など）であり、他は感情を測定している。すなわち、LSIAは長期的認知と短期的感情を、改訂PGCモラル・スケールは短期的な認知と感情を測定しているといえる。改訂PGCモラル・スケールの方がより純粋で内面的な幸福感を測定するのにふさわしいとされており、本研究でもこのスケールを用いた。

さらに、古谷野ら（1989）はLSIA、PGCモラル・スケール、Kutner, et al（1956）のモラル・スケールの質問項目を組み合わせて、9項目からなる生活満足度尺度K（LSIK）を作成している。LSIKは「人生全体についての満足度」「心理的安定」「老いについての評価」の3因子から構成されているという。

以上のように、尺度の開発と改訂のための研究が蓄積されてきている。作成されたこれらの尺度は相互に類似し、得点間には強い正の相関関係があることが明らかになっている。最初に、主観的幸福感の関連要因の分析が盛んに行われたのは、1960年代の活動理論（activity theory）と離脱理論（disengagement theory）の論争の時期であった。そこでは、社会的活動を説明変数、主観的幸福感を目的変数とする分析によって、活動理論の検証が試みられた。その後、この2つの変数以外の影響要因と考えられる健康や年齢などを変数に加えて分析が試みられてきた。さらに最近では、ソーシャル・サポートやソーシャル・ネットワークなどの研究でも使用されている。

主観的幸福感の要因分析の結果については、おおよそ次のようにまとめられる（Larson, 1978；前田ら, 1979, 1989；藤田ら, 1989）。まず、高齢者の健康はほとんどの研究で主観的幸福感に最も大きな影響を及ぼしている。次に社会経済的地位の影響についても多くの研究で、主観的幸福感に有意な影響を及ぼしていることが明らかになっている。なかでも収入の影響がはっきりでている。さらに、社会的活動や社会的相互作用の影響についてもたびたび指摘されている。この3つの変数が高齢者の主観的幸福感に最も大きな影響を及ぼす要因であるといえそうである。アメリカの研究では、配偶者の有無が高齢者の主観的幸福感に有意な影響を及ぼすとされているが、日本の研究では有意な影響は認められない。前田ら（1989）は日本ではアメリカと異なり、配偶者との死別後は子供と同居している者がほとんどであるので、主観的幸福感が低下しないと考えるべきか、としている。そのように考えるならば、独居高齢者の主観的幸福感は一般の高齢者より低いことも予想される。

既存研究の成果から導かれた高齢者が幸福に老いるための条件は、「健康と経済状態と人間関係の豊かさ」を満たすことだといえる。

III 方 法

1. 分析対象

本研究で分析するデータは、長野県北信5市町村の一人暮らしである60歳以上の男女を対象として、1995年10～11月に実施された配票調査から得られた。調査対象者の抽出は市町村社会福祉協議会の一人暮らし老人名簿によった。調査対象者数は622名、有効回答率は79.7%であり、496名のデータを得た。

496名の独居高齢者は女性が80.8%であり、長野県の独居高齢者の男女比とほぼ一致している。年齢は60歳から99歳の広い範囲に分布しており、70歳代が48.6%と半数近くを占め、次いで60歳代21.4%、80歳以上20.0%であり、平均75.0歳であった。居住年数は1年から99年に分布しているが、30年以下は1割程度しかない。「31～60年以下」43.6%、「61～99年以下」43.7%となっており、居住年数は長い。このことから、地域に「とても愛着を感じている」と76.0%が回答している。平均居住年数は55.9年である。別居子の数は平均2.5人であり、子どもがいないのは16.3%である。収入のある仕事をしているのは24.0%であり、仕事の内容は農林業38.7%、臨時・パート・日雇い26.9%、自営業14.3%となっており、常勤の勤め人は4.2%にすぎない。最長職も農林業が43.1%を占めている。

健康状態は「非常に健康」または「普通」であると回答したのが60.2%であり、残りの4割は「あまり健康でない」または「病気がち」であると回答している。通院しているのは71.4%である。また、「あなたは同世代の人と比べて健康だと思いますか」という比較健康感については、「かなり健康」16.9%、「やや健康」48.4%、「やや劣る」25.4%、「かなり劣る」6.5%と、65%が同世代より健康だと評価している。

一人暮らしになった理由は、配偶者との死別が74.2%と最も多い。一人暮らしの期間は「10年以下」が55.3%と半数以上を占めているが、30年以上も4.0%おり、最長は60年であった。独居期間が長い人では「夫の戦死」という理由も挙げられていた。平均独居期間は12.5年である。また、別居子と会う回数は「ほぼ毎日」10.1%、「週に1～2回くらい」29.4%、「月に1～2回くらい」24.0%となっており、4割は週1回以上別居子との交流をもっている。

2. 幸福度の測定尺度と関連要因

被説明変数である幸福な老いの程度の測定には、改訂PGCモラル・スケールを用い、その合計得点を使用した。表1に17の質問項目を示した。「より幸福度の高い」回答をした方に1点を、そうでない回答をした方に0点を与え、加算得点によって幸福度の程度を測定するものである。得点は0～17点に分布し、加算得点が高いほど幸福度の程度が高いことを意味する。この尺度は既述のとおり17項目からなる多次元尺度であり、3つの因子から構成されているという。

関連要因としては、性、年齢、居住年数、職業の有無、地域への愛着度、健康度、経済状態の満足度、4つの関係カテゴリー（別居子、親族、友人や隣人、ヘルパーや民生委員）別のソーシャル・サポートの11変数を取り上げた。

各変数のカテゴリー区分に関して若干説明を加えると、健康度は対象者の評価とし、「非常に健康、普通」「あまり健康でない」「病気がち」とした。経済状態の満足度は「とても満足している」「まあ満足している」「あまり満足していない、全く満足していない」とした。

表1 改訂PGCモラール・スケールの項目別集計 (%)

質 問 項 目	1点	0点	無答
(1) あなたは自分の人生が年をとるにしたがって、だんだん悪くなっていくと思いますか。 1. そう思う <u>2. そうは思わない</u>	52.8	40.9	6.3
(2) あなたは去年と同じように元気だと思っていますか。 <u>1. はい</u> 2. いいえ	59.1	36.1	4.8
(3) 寂しいと感じることがありますか。 <u>1. ない</u> <u>2. あまりない</u> 3. 時々感じる 4. 感じる	60.6	44.6	4.8
(4) 最近になって小さなことを気にするようになったと思いますか。 1. はい <u>2. いいえ</u>	60.9	33.3	5.8
(5) 家族や親戚、友人との行き来に満足していますか。 <u>1. 満足している</u> 2. もっと会いたい	82.7	11.1	6.2
(6) あなたは年をとって前よりも役に立たなくなったと思いますか。 1. そう思う <u>2. そうは思わない</u>	27.6	66.1	6.3
(7) 心配だったり気になったりして、眠れないことがありますか。 1. ある <u>2. ない</u>	46.8	49.2	4.0
(8) 年をとるということは、若いときに考えていたよりも良いことだと思いますか。 <u>1. よい</u> 2. 同じ 3. 悪い	24.6	68.5	6.9
(9) 生きていても仕方がないと思うことがありますか。 1. ある <u>2. あまりない</u> <u>3. ない</u>	80.8	12.9	6.3
(10) あなたは若いときと同じように幸福だと思いますか。 <u>1. はい</u> 2. いいえ	55.6	37.9	6.5
(11) 悲しいことがたくさんあると感じますか。 1. はい <u>2. いいえ</u>	71.6	23.2	5.2
(12) あなたは心配なことがたくさんありますか。 1. はい <u>2. いいえ</u>	57.2	36.3	6.5
(13) 前よりも腹を立てる回数が多くなったと思いますか。 1. はい <u>2. いいえ</u>	83.5	9.9	6.6
(14) 生きることは大変きびしいと思いますか。 1. はい <u>2. いいえ</u>	31.5	63.5	5.0
(15) 今の生活に満足していますか。 <u>1. はい</u> 2. いいえ	78.4	15.3	6.3
(16) 物事をいつも深刻に考えるほうですか。 1. はい <u>2. いいえ</u>	40.1	54.2	5.7
(17) あなたは心配事があると、すぐにおろおろするほうですか。 1. はい <u>2. いいえ</u>	58.7	35.9	5.4

※下線の回答には1点が与えられる

ソーシャル・サポートは①別居の子ども、②きょうだいやその他の親族、③友人や隣人、④ホームヘルパーや民生委員、という4つの関係カテゴリーごとに、援助に関する次の5項目にあてはまる人がいるかどうかを尋ね、それぞれの関係カテゴリー別にあてはまる人がいる項目数を算出して分析に用いた。援助に関する5項目は、①相談にのってくれる人、②気持ち落ちついたり、心がなごむ人、③おしゃべりしていて楽しい人、④ちょっとした用事を頼める人、⑤1カ月くらい寝込んだとき、看病や世話を頼める人である。①～③は情緒的サポートであり、④⑤は手段的サポートである。

3. 幸福感に影響を及ぼす要因の検討

まず第1に、モラール得点を算出し、先行研究の結果と比較する。また、主成分分析法を

用いてモラル・スケールの因子構造を確認する。なお、分析に用いられたケースはモラル・スケールの17項目全問に回答してあることとしたので、413ケースである。第2に、モラル得点を従属変数、高齢者の特性をあらわす性、年齢、居住年数、職業の有無、地域への愛着度を独立変数または共変量とした分散共分散分析を行った。続いて、モラル得点を従属変数、健康度、経済状態の満足度を独立変数とした分散共分散分析を行った。さらに、ソーシャル・サポートの影響を捉えるために、モラル得点を従属変数、4種のソーシャル・サポートを独立変数として重回帰分析を行った。第3に、第2の分析で有意水準に達した変数を独立変数または共変量とした分散共分散分析を試みて、モラル得点に影響を及ぼす要因を再検討した。

以上のデータの集計・分析には SPSS-X を用いた。

IV 結果および考察

1. 改訂 PGC モラル・スケールの測定

表-1にモラル・スケールの質問項目別の集計結果を示した。モラル得点の平均値は10.37点、標準偏差は3.80の分布になっている。ミシガン大学老年学研究所と東京都老人総合研究所社会学部が共同で実施した日本全国を調査対象地域とした representative sample による調査結果(前田ら, 1989)では、モラル得点の平均値は11.23であり、本調査の独居高齢者は全国平均より0.86点低くなっている。この他の一般老人を対象にした特定のエリアサンプルの結果と比較しても、本調査のモラル得点は低めである。男女別では、男性10.63点、女性10.32点とほとんど差はない。

質問項目に対する回答傾向を先の全国調査の結果と比較すると、幸福感を高めるような回答が全国調査より第7項目では22.8ポイント、第6項目では19.1ポイント、第12項目では18.ポイント低くなっているのが目につく。本調査における独居高齢者にこれらの項目の幸福感が低かったことが、モラル得点を低くおさえている。特に第6項目は女性に低く、男女差が大きくなっている。

表-2は本調査データに基づく改訂 PGC モラル・スケールの因子構造を示したものである。3つの因子が抽出されたので既存のモデルと比較してみると、因子構造にやや違いがみられるものの、類似した傾向を読みとることができる。Cronbachの α 係数は.81で、十分な値を示している。

2. 幸福感に影響を及ぼす要因

モラル得点へ的高齢者の特性に関する変数の影響を分析した結果は表-3のとおりである。性、年齢、居住年数、職業の有無、地域への愛着度の5変数のうち、職業の有無と地域への愛着度の寄与が統計的有意水準に達し、性、年齢、居住年数は有意水準に達しなかった。規定力の方向性を多重分類分析表からみると、職業を持っているほうがモラル得点が高く、また地域への愛着度が強いほうがモラル得点が高い。重相関係数は.222であった。健康度、経済状態の満足度については、両者に有意な影響力がみられた(表-4)。健康であり、経済状態に満足しているほどモラル得点が高い。重相関係数は.494である。ソーシャル・サ

表－2 改訂PGCモラル・スケールの主成分分析

質 問 項 目	因子負荷量		
	I	II	III
第I因子			
17. 心配事があると、すぐにおろおろする	.742	.035	-.021
4. 小さなことを気にする	.715	.220	.021
16. 物事をいつも深刻に考える	.663	-.024	.011
7. 心配だったり気になったりして、眠れない	.639	.114	.211
6. 年をとって前よりも役に立たなくなった	.441	-.023	.407
2. 自分の人生が年をとるにしたがって悪くなる	.432	.334	.098
14. 生きることは大変きびしい	.404	.363	.182
第II因子			
11. 悲しいことがたくさんある	.162	.657	.152
15. 今の生活に満足している	.077	.649	.019
12. 心配なことがたくさんある	.342	.575	.212
2. 去年と同じくらい元気	.030	.491	.007
10. 若いとき同じように幸福	.093	.453	.316
8. 年をとることは、若いときに考えていたより良い	.003	.325	.219
第III因子			
9. 生きていても仕方がない	.080	.237	.606
13. 前より腹をたてる回数が多くなった	.309	.425	-.552
3. 寂しいと感ずることがある	.415	.271	.481
5. 家族や親戚、友人との行き来に満足	.140	.306	.476
因子寄与率 (%)	25.9	8.5	6.8

表－3 モラル得点に影響する要因(1) —— 高齢者の特性 ——

1. 分散共分散分析表				自由度	F 値	
性 別				1	.71	
職業の有無				1	7.16**	
地域への愛着度				1	10.84**	
年齢 (共変量)				1	.61	
居住年数 (共変量)				1	.09	
2. 多重分類分析表				人数	調整後偏差	Beta
性 別	女	性		312	-.08	.04
	男	性		65	.36	
職業の有無	あ	る		103	.89	.14**
	な	い		274	-.33	
地域への愛着度	とても感じている			301	.32	.17**
	少し感じている			76	-1.28	
	感じていない					
重相関係数 (R)				.222**		

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

表—4 モラル得点に影響する要因(2) ——健康と経済——

1. 分散共分散分析表			
	自由度	F 値	
健康度	2	24.71***	
経済状態	2	24.56***	
2. 多重分類分析表			
カテゴリー	人数	調整後偏差	Beta
健康度	非常に健康・普通	.80	
	あまり健康でない	-.82	
	病気がち	-3.10	.32***
経済状態	とても満足	1.56	
	まあ満足	.16	
	満足していない	-2.58	.32***
重相関係数 (R)		.494***	

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

ポートについては、別居子からのサポートの平均値は3.39、標準偏差は1.83、Cronbachの α 係数は.88である。きょうだいやその他の親族からのサポートの平均値は2.53、標準偏差は1.85、 α 係数は.81である。友人や隣人からのサポートの平均値は3.01、標準偏差は1.49、 α 係数は.71である。ホームヘルパーや民生委員からのサポートの平均値は1.02、標準偏差は1.41、 α 係数は.75である。これら4つの関係カテゴリー別のサポートのうち友人や隣人からのサポートは有意な影響を及ぼしていないが、別居子、きょうだいやその他の親族、ホームヘルパーや民生委員からのサポートは有意な影響が認められた(表—5)。重相関係数は.223であった。

以上の分析で有意な影響力を示した7つの変数を独立変数または共変量として、モラル得点への影響を吟味した結果は表—6のとおりである。地域への愛着と別居子からのサポートの効果が消え、職業の有無、健康度、経済状態の満足度、きょうだいやその他の親族のサポート、ホームヘルパーや民生委員のサポートが有意な影響力をもつ要因であることが明らかになった。重相関係数は.529であった。

職業の有無については、前述の全国調査の結果では全体としては有意な影響力が認められなかったが、女性だけを分析した場合には有意な影響力が認められている。このことから本調査で職業の影響が示された理由の1つとして、対象者の8割が女性であることが関係していることも考えられる。収入のある仕事の内容は農林業39%、臨時・パート・日雇い27%であり、調査地域が地方の農村が中心であることから、生きがいとしての就労になっていることも考えられる。

健康度と経済状況が高齢者の幸福感に有意な影響を及ぼすことは先行研究が等しく示しているところであって、本研究の結果は先行研究の知見を再認識するものであった。この2変数を投入したときの重相関係数が飛躍的に増大しているのは特徴的である。表—6で示した

表—5 モラル得点に影響する要因(3)——ソーシャル・サポート——重回帰分析

	標準偏回帰係数(β)	相関係数
別居子	.102*	.112*
きょうだい・その他の親族	.104*	.125**
友人・隣人	.086	.100*
ホームヘルパー・民生委員	-.135**	-.126**
重相関係数 (R)	.223**	

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

表—6 モラル得点に影響する要因(4) ——最終分析——

1. 分散共散分析表

	自由度	F 値
職業の有無	1	4.20*
地域への愛着度	1	3.21
健康度	2	17.97***
経済状態	2	19.89***
別居子サポート (共変量)	1	.04
きょうだい・親族サポート (共変量)	1	8.80**
ホームヘルパー・民生委員サポート (共変量)	1	4.19*
重相関係数 (R)		.529***

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

7変数を用いた分析の決定係数 (R^2) は.280であるのに対して、この2つの変数を用いた表—4の分析では.244であることから、健康度と経済状況という2つの変数は独居高齢者の幸福感に影響を与えている2大要因であるといえる。

一般に、人間関係の豊かさはソーシャル・ネットワークとソーシャル・サポートに分けて捉えられる。前者は人間関係の量的側面、後者は質的側面であるとされている(野口,1993)。本研究ではソーシャル・サポートを人間関係の指標としたが、調査ではソーシャル・ネットワークの規模(親しくしている別居子、友人、近隣の数)についてもたずねている。両者の関係をみると、例えば、親しくしている別居子の数と別居子からのサポートとは強い正の相関がみられる($r=.547$)というように、いずれも正の相関関係が観察される。そこで、本研究では質問した関係カテゴリーが多いソーシャル・サポートの方を用いている。別居子からのサポートおよび、友人や隣人からのサポートは独居高齢者のモラル得点を高める方向への効果をもっていなかったが、きょうだいやその他の親族のサポートはモラルを高める方向への効果をもっていた。この結果は地方の農村の特徴であるかも知れない。都市では近くに親族が住んでいることは少ないが、農村では比較的多いと思われる。そのような状況で、親族ネットワークの効果が表れているのではなかろうか。また、ホームヘルパーや民生委員

の影響も示されたが、これはマイナスの影響であって、これらの人々のサポートが多い高齢者のモラル得点は低いのである。勿論、ホームヘルパーや民生委員からサポートを受けることが幸福感を低めているという解釈ではなく、これらの人々からサポートを得ているが、現状のサポートでは独居高齢者の幸福感を高めるほどのサービスになっていないということであろう。高齢者個々のレベルではホームヘルパーや民生委員からのサポートが幸福感を高めるように作用していると考えられるが、その結果をこれらの人々からのサポートを受けていない高齢者と比較すると、幸福感はまだ低いということだろう。

V お わ り に

本稿では幸福な老いの測定とその関連要因に関する先行研究の成果を紹介し、独居高齢者の幸福感とその関連要因を検討した。加齢による心身機能の衰退、社会・経済的地位や役割の喪失によって、自身の生きている意味や価値が問題になる老年期において、一人暮らしの高齢者個々人が抱く幸福感がいかなる要因の影響を受けるかを検証することに目的があった。分析から得られた知見を要約すると、以下のとおりである。

まず第1に、本分析で用いた独居高齢者の幸福感は全国調査の結果よりも低いことが示された。一人暮らしであることが、高齢者の幸福感に影響を及ぼすか否かについては、一致した結果が得られていないが、独居高齢者を分析した研究が少ないので今後の研究の蓄積が期待される。

第2に、独居高齢者の幸福感に有意な影響を与えているのは職業の有無、健康度、経済状態の満足度、きょうだいやその他の親族のサポート、ホームヘルパーや民生委員のサポートであることが明らかにされた。なかでも健康度と経済状況は独居高齢者の幸福感に影響を与えている2大要因であるといえる。また、ソーシャル・サポートのなかでは親族からのサポートが有効であり、地域や文化の影響が示唆される。健康と経済状態と人間関係の豊かさを満たすことが、幸福に老いるための条件はだといえそうだが、人間関係の豊かさの指標についてはより一層の研究が望まれる。さらに、現状でのホームヘルパーや民生委員のサポートも独居高齢者の幸福感を高めるほどのサービスにまではなっていなかった。

本研究では主観的幸福感の関連要因に関して、多変量解析における主効果について分析したが、交互作用については分析していない。交互作用に関しては未解明の部分も多く、本研究で使用したデータについても、交互作用に着目した分析を行うことによって、より多くの知見を得る可能性が残されている。

文 献

- Adams, D. L. 1969 Analysis of a life satisfaction index. *Journal of Gerontology*, 24, 470-474.
藤田利治, 大塚俊男, 谷口幸一 1989 老人の主観的幸福感とその関連要因 *社会老年学*, 29, 75-85.
George, L. K. 1981 Subjective well-being: Conceptual and methodological issues. *Annual Review of Gerontology and Geriatrics*, 2, 345-382.

- George, L. K. and Bearon, L. B. 1980 *Quality of Life in Older Persons : Meaning and Measurement*. Human Science Press.
- Hoyt, D. R. and Creech, J. C. 1983 The Life Satisfaction Index : A methodological and theoretical critique. *Journal of Gerontology*, 38, 111-116.
- 古谷野亘, 柴田博, 芳賀博, 須山靖男 1989 PGC モラール・スケールの構造：最近の改訂作業がもたらしたもの 社会老年学, 29, 64-74.
- Kutner, B., Fanshel, D., Togo, A. M. and Langner, T. S. 1956 *Five Hundred over Sixty : A Community Survey on Aging. (Rep.)* Arno Press.
- Larson, R. 1978 Thirty years of research on the subjective well-being of older Americans. *Journal of Gerontology*, 33, 109-125.
- Lawton, M. P. 1975 The Philadelphia Geriatric Center Morale Scale : A revision. *Journal of Gerontology*, 30, 85-89.
- Liang, J., Asano, H., Bollen, K. A., Kahana, E. F. and Maeda, D. 1987 Crosscultural comparability of the Philadelphia Geriatric Center Morale Scale : An American-Japanese comparison. *Journal of Gerontology*, 42, 37-43.
- Liang, J. and Bollen, K. A. 1983 The structure of the Philadelphia Geriatric Center Morale Scale : A reinterpretation. *Journal of Gerontology*, 38, 181-189.
- Liang, J., Tran, T. V. and Markides, K. S. 1988 Differences in the structure of Life Satisfaction Index in three generations of Mexican Americans. *Journal of Gerontology : Social Sciences*, 43, 1-8.
- 前田大作, 浅野仁, 谷口和江 1979 老人の主観的幸福感の研究：モラール・スケールによる測定
の試み 社会老年学, 11, 15-31.
- 前田大作, 野口祐二, 玉野和志, 中谷陽明, 坂田周一, Jersey Liang 1989 高齢者の主観的幸福感の構造と要因, 社会老年学, 30, 3-16.
- Neugarten, B. L., Havighurst, R. J. and Tobin, S. S. 1961 The measurement of life satisfaction. *Journal of Gerontology*, 16, 134-143.
- 野口祐二 1993 「老年期の社会関係」, 柴田博, 芳賀博, 長田久雄, 古谷野亘編『老年学入門：学際的アプローチ』, 185-194, 川島書店.

(1996年8月30日 受理)